廣讃寺ジャーナル

第40号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623

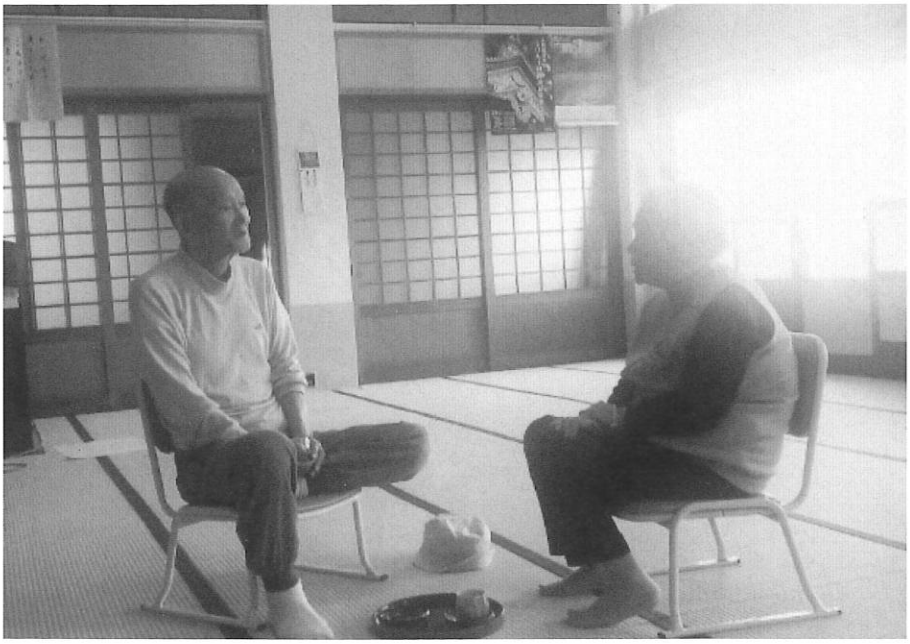
朝には紅顔ありて

五月二十六日の朝、朝食を食べられ、そしてベッドに横になり、そのまま還浄されました。

大変急な事でしたので気が動転し、二・七日を勤めた今でも当時の事がよく思い出せません。目覚める事のない住職を見たその瞬間から、雰囲気、環境、世界がガラッと変わりました。その大変動に対応する術もなく、五月三十一日の通夜式、六月一日の葬儀式を迎えました。葬儀式の最後、喪主挨拶の時も頭の中が真っ白になり、何を言っているか分からなくなりました。たくさんの門徒の方々にお手伝いをしていただいておりましたが、私も頭の中がパニックになっておりましたので、いろいろとご無礼があったかと思いますが、ご容赦ください。

今回の住職の葬儀は一部始終住職が用意されていったものだと痛感しました。住職の真宗教化活動、住職の人柄がたくさんの人を寺に集め、そして廣讃寺を興隆するために強い団結力ある門徒組織を作っていかれました。その門徒の方々が一丸となり、一生懸命に葬儀を開くことができたのだと思います。

住職は昨年の夏ごろから急に弱られました。去年の報恩講でのお勤めの間も、かなりしんどい様子で、内陣出仕も少し危なっかしいと感じるほどで



した。今年になってからは、寒さのためか寝室の暖房をつけてベッドに横になられていることが多くなりました。しかし、学習会や二十八日講はしっかりと法話をされました。

春の彼岸永代経の時は「疲れた、疲れた」と言われてました。「大順さん（私の祖父）は、いつまで内陣出仕したか」と尋ねられ「九十までだよ」と答えたら「なら、わしもまだまだ頑張らんといかんな」と話をされていたことが深く

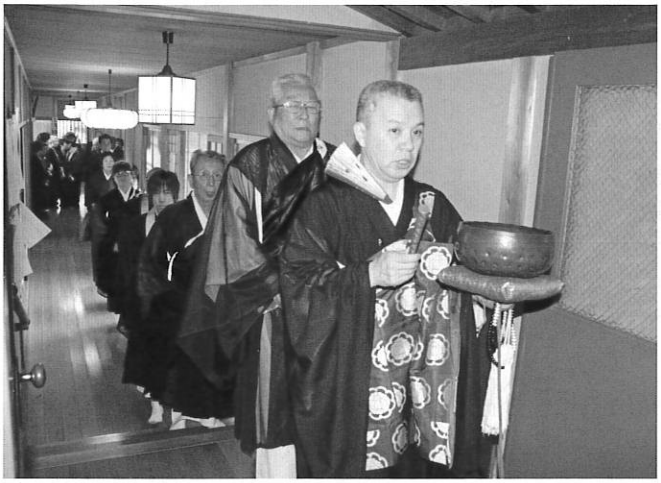
お別れ勤行

深く印象に残っています。

五月五日の復興永代経の時には、声も出づらくなり、歩くのもかなり困難な状態になりました。しかし、本堂建立から四十八年、想像を絶する気力でお勤めをされていました。五月十四日には同年の幼なじみが亡くなり、五月十八日には、お寺の隣の先輩が亡くなりました。その事に住職はひどく悲しまれておりました。五月十九日に亡くなられた学習会会員追弔法要を勤めました。この追弔法要も三月に住職が立案したものです。その法要の時に二時間ほどでしょうか、大変長い間法話されていました。後に「十九日の学習会で疲れた。えらい」とおっしゃられてました。もうこのごろになると外出する事がない日がほとんどになりました。しかし五月二十二日、渾身（こんしん）の力をふりしぼり御庫裏（おくり）さんの病院へお見舞いに行かれました。そして五月二十五日「咳がひどいから往診をお願いしてくれ」と言われ、往診してもらいました。肺炎を抑える薬が大きく、それを飲み込む事がとても難儀でした。というよりもう、コップ半分の水を飲むのも死に物狂いでした。そして、それからお休みになられ、五月二十六日を迎えたわけです。

住職の法名は、讃海院釋亮昭です。院号は、岩塚の浄信寺さんにつけて頂き、廣讃寺の『讃』に本願海の『海』。本願海を讃えるという意味です。

庭儀



七月十三日（水）午後二時より法話、午後四時より満中陰法要が勤まります。住職の盛り上げた廣讃寺を引き継ぐ重さを今更ながら感じると同時に、特有の方法で偉業を成し遂げた住職に心から尊敬の念を抱きます。

釋　貴志

棺前勤行

肩入れ式

葬場勤行

九十歳で還浄される
御院主様が亡くなった
本当に長い間いろいろと
教わった
わしもすぐに往くでよー

伊藤和美

合掌

本当のさようならしたんだね。

五月二十六日木曜日午前十時、八十九歳で亡くなられた。私は別れと、揺るぐ心も分かりたくないと悲鳴をあげている。多くの強い言葉、きつい言葉、笑ってしまう言葉、あたたかな言葉をいっぱいもらったね。

住職がおられた時、「今から行くから」が数カ月前は、「おまえさんが来るかい。それともわしが行くかい」と電話がかかる。今もかからぬ電話を待つ日々……。

もっと聞けばよかった。お話してと声に出して問いても返事はもうない。

この一年はよく老いていく怖さを口に出されていた。歳を取る寂しさも踏まえて「若くなりたい、まだまだしたいことがいっぱいあるでな」と言っておられた。

「皆等しく弥陀浄土の生まれんことを」

住職の希望そんな大きな人だからなおつらい。独り言…近くにいてくださってありがとう。最愛なる奥様をちょっと先で見守っていてください。

晃雅

還骨勤行

三月の学習会で住職より「陶淵明」の雑詩を学びました矢先に、このような御命終の報に接することになろうとは思いもよりませんでした。つくづく人生の無常を感じます。住職には九十七歳で亡くなりました義母の代から大変お世話になりました。

「雑詩」

人生根蔕無く
瓢として陌上の塵の如し
分散して風を隨いて転ず
此れ已に常の身に非ず

意訳…人生は根なし草であり人生は塵のようなものだ。塵は風に散らかってゆく。人間は常にある身ではない。

（ご講義中の師の姿が目に浮かびます）

追悼句

五月雨の 降り残しける 師の御影　　えみこ

ご案内

当山住職　讃海院釋亮昭

満中院法要執行

日時　七月十三日（水）

午後二時　法話　勅使英照師

午後四時　満中陰大法要

万障お繰り合わせの上お参り下さい

七月九日（土）七時　同朋委員会・例会

十九日（火）二時～四時　学習会

二十四日（日）六時半　納涼大会（雨天決行）

納涼大会

人形劇

金魚すくい・輪なげ・ビンゴ大会などなど…

楽しい催しものがいっぱい。

どなたでもご参加ください。

二十五日（月）九時　後片付け

二十八日（木）十時　二十八日講・女人講